

聖書：ローマ7：14～25

説教題：みじめな人間

日時：2015年10月18日

ローマ書7章後半。ローマ書の中でも特に有名な箇所の一つです。特に15節以降のパウロの独白は全聖書の中でもひととき印象的な御言葉でしょう。一方、ここはどのように解釈すべきか、議論が分かれて箇所でもあります。ポイントは、これはいつの時代のパウロについて述べているものかということ。救われる以前のパウロか、それともこの手紙を書いた時の成熟したクリスチャン・パウロか。ある人々はここは現在形で書かれているからローマ書を書いた時のパウロのことであると理解します。すなわちクリスチャンは救われてもなお「私はみじめな人間です！」と叫ばざるを得ない弱さと戦いの中にあることをこの箇所は述べている、と。この解釈をとる代表的な神学者としてはアウグスティヌス、ルター、カルヴァン、ホッジ（1837）、J. マーレー（1959）などをあげられます。これに対して異なる理解をする保守派の学者たちも多くいます。すなわちこれは回心前のパウロの状態を述べているものである、あるいは律法の下にあってキリストに信頼していないユダヤ人のことを述べている、と。こちらの解釈を取る神学者としてはロイド・ジョーンズ（1973）、A. フーケマ（1989）、R. レイモンド（1998）、D. ムー（1996）、C. クルーズ（2012）などがあげられます。このように尊敬すべき神学者たちの間でも意見は分かれています。果たしてどちらを取れば良いのでしょうか。

これは信者であるパウロのことであると理解する人たちの主な根拠は三つです。一つは7章14節から時制が現在形に変わっていることです。二つ目は特に22節で彼が「神の律法を喜んでい」と述べていることです。回心していない人はこうは言えない。これはこの人が再生していることの明確な証拠である、と。三つ目は25節に「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します」とあることです。こう言えるのはクリスチャンである。従ってこの独白全体はクリスチャンの告白であると。しかしこれに反対する立場の人たちは言います。一つ目の現在時制に対しては、過去のことでも生き生きとドラマティックに語るために現在形を用いることはあり得る、と。そういう用法はギリシャ語にもあると。二つ目の「神の律法を喜ぶ」については、律法に熱心なユダヤ人ならみなそう言えるということですから。律法を高く評価し、これを誇り、大切に人は、「私は神の律法を喜んでい

るのに」という表現を使い得る、と。三つ目の 25 節については少し細かく見る必要があるのでは後に触れます。

では反対にこれはキリストを信じる以前のパウロを指しているとする人たちの根拠は何でしょうか。それはまず 7 章 14 節で「私は、売られて罪の下にある」と述べられていることです。パウロはこれまで信者は「罪に対して死んだ」とか「罪から解放されている」とか「罪はあなたがたを支配することがない」と言って来ました。それと全く矛盾するということです。また 7 章 23 節に「罪の律法のとりこ」になっているとあります。すなわち罪という法則・原理の奴隷になっていると。しかしこの後の 8 章 2 節では「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放した」と言われます。ですからもし 7 章 23 節がクリスチャンの状態だとすれば、パウロの言っていることは支離滅裂になってしまう。これに反対する人は、7 章 23 節の「とりこ」という言葉は絶対的な意味に取るべきではないとか、これはパウロのそれほどの罪意識を表しているなどと述べてその意味を和らげようとしています。

細かい点では双方の言い分がなお色々あるでしょう。しかし文脈で考えれば、6 章でクリスチャンは今や罪の下にはないと言われました。そして 7 章では律法の下にもないと言われてきました。前回の 7～13 節で律法は良いものだが私たちを救えない。それは私たちの罪が問題だからだと述べられました。このポイントより印象的に、自分の体験を踏まえて独白の形式で語っているのが今日の箇所なのではないでしょうか。これまで罪や律法からの解放を聖化の基礎として力強く述べて来たパウロが、ここで突然、今の私は「罪の下にあります」とか「罪のとりこになっています」などと述べたら、今までのことは一体何だったのか！ということになってしまいます。むしろこの 7 章後半は、信仰者パウロが、かつての自分の状態を振り返りつつ、今なお律法の下でそれにしがみついている人がどんな状態にあるかを描いている部分と見るのが自然でしょう。そしてそのみじめな状態から神はキリストにあって救ってくださった！ということが続く 8 章で語られます。以下、少し小さな部分にも注目していきたいと思います。

まず 14 節でパウロはこう言います。「私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。」

ここに律法は「靈的」と語られる一方、私は「罪ある人間」と言われています。「罪ある人間」という部分は直訳では「肉」という言葉です。つまりここには「靈」と「肉」の対比があります。ここに問題の根があります。すなわち律法は良いのに、私が良くない。肉である私には、靈的な律法も、何の益ももたらせない。パウロは15節のように告白します。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」これは皆さんも経験済みのことでしょう。私はかつて兄弟げんかなどをして父に叱られた時、これからは夜にその日の自分の歩みを反省して、良かったことと悪かったことを振り返ってみるようにしなさいと言われました。そのことをしてみると、来る日も来る日も神の前で良いことはなかなか思いつかないのに、悪いことはたくさん出て来ます。本当はそんな悪いことは考えたり、行なったりはしたくない。そういう意味で16節にあるように、神の律法は良いものだと認めてはいます。律法にかなうことを行ないたい。ところが現実にはしたくないことをしている。なぜでしょう。パウロは17節のように言います。「ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。」

ここに二つのことが述べられています。一つは私の内には普段私が意識していない私がいるということです。パウロはここで責任転嫁をしたり、言い訳をしようと思っているわけではありません。彼は良いことを願い、それを行ないたいと思っています。なのになぜそれができないのか。パウロの答えは、そこにもう一つの存在があるからだということです。隠れていて良く見えなかった、私の生活に大きな影響を与えている存在がある。それは私の内に住みついている罪である！これは私の内に住みついているものですから、他人ではなく、私自身です。そして第二点目は、この私の内に住みついている罪は圧倒的な力を持っているということです。善をしたいと願う私をがっちり捕まえ、支配して、思い通りの方向へ連れて行く。ここに私たちが願う通りに歩めない原因があるのです。

18節でパウロは続けます。「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私は善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」 「善が住んでいない」とありますが、一つも善がないという意味ではありません。善をしたいと願う心があるという意味の善はあるのです。しかし自分の内に「住んでいる」と言える力は善ではない。むしろ私

の内に「力を持って住んでいる」のは「悪」である。21 節：「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」 この「見いだす」という言葉は、アルキメデスがお風呂で浮力と質量に関する法則、いわゆるアルキメデスの原理を発見した時に使った言葉です。彼は「発見した」「発見した」と言いながら裸で町の中を走ったと言います。しかしこの 21 節のパウロの発見は嬉しい発見ではなく、知った瞬間に愕然とする発見です。自分の存在の本質についてのあまりにも悲しい発見です。

この 21 節は、私にとっては信仰告白のきっかけとなったみことばでした。自分の罪を自覚し、救いを得たいと願って、夏の中学キャンプに参加しました。そこで神のメッセージに満たされ、もはや信じるしかないと思い、決心の招きにも手を上げ、神に喜ばれる新しい生活を祈り願って帰って来ました。ところが長続きしません。相変わらず罪の塊である自分に幻滅して、とても洗礼など受けられませんでした。そして次の年も、その次の年も、同じようにキャンプに参加し、信仰の決心をして帰って来ては、罪の生活を繰り返す自分に失望しました。このようなことを繰り返すとだんだん絶望的になって来ます。自分はこの調子で一生救いの喜びを知らないまま終わるのではないか。そして救われないのではないか。そのように悩んでいた時にこのローマ書 7 章の言葉が自分の中にスッと入って来ました。「この私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」 これこそ自分の本質を言い当てた真理だ、ということに心から同意できた。まさに発見です。しかしこの発見は同時に非常なショックをもたらすものでした。もしこれが本当なら、——今まさに自分はそうだと確信したが、——自分はこれからもずっとこのようにしか歩めないことを意味する。この悪が私に宿り続けている限り、私は一生、願わないことを行ない、後悔し続ける歩みしかない。そう思った時、これから先の人生が真っ暗になるような感じがしました。パウロは 22 節 23 節でこう言います。「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」 仮に私が聖書を読んで律法を喜び、それによって歩みたいと願っても、私の内に宿る悪が常に戦いを挑んでくる。そして結局は私が願わない方向へ私を捕えて連れて行く。自分はこの力から逃れられない。そのことが分かった時、私たちから出て来るのは 24 節の嘆きのみでしょう。「私は、本当にみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出

してくれるのでしょうか。」

これは自分の内に住む罪の恐ろしさを自覚した者の叫びです。前回見たように、この罪はある時は眠っているようでもあります。死んでいるような時もあります。しかし最終的には私を牛耳っている力として、それが思う方向へと私を連れて行く。今、それは静かかもしれません。しかしいつ暴発するか分からないのです。いやよく考えれば、今までの人生においてもこの罪はたくさん暴発して来たのではないのでしょうか。多くの人に嫌な思いを私の罪は与えて来たのではないのでしょうか。周りの人を傷つけ、様々な言葉や態度で殺して来たのではないのでしょうか。自己中心の振る舞いによって多くの人を悲しませ、落胆させ、我慢させ、多大な迷惑をかけて来たのではないのでしょうか。そしてこれまでがそうなら、これからもそうでしょう。今鳴りを潜めていても、これが私の人生の支配者なのです。そのことを知る人は24節のように心から叫ばざるを得ないのではないのでしょうか。

しかし大いなる慰めは、この叫びのただ中に25節の言葉があることです。25節前半：「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」なぜここで調子が明るく変わるのか。私も最初は不思議でした。しかし良く見て分かることは、ここに初めて「神」とか「キリスト」という文字が出て来ることです。これまではずっと「私」「私」「私」「私」のオンパレード。つまり自分を見ている限りは望みがないということです。そこに救いの根拠を見いだそうとしてもムダである。その行き着く先は24節の叫びのみ。しかしそんなパウロも、ただ「主イエス・キリストのゆえに、神に感謝します」と言うことができた。それなら私もそれで良いのではないか。自分の内に救いの根拠を見いだそうとする努力は一切捨て、ただ神とキリストに目を上げて！と。これが、自分の行ないにはよらず、ただ神の恵みに信頼して踏み出す私の信仰の歩みの第一歩となりました。

しかしパウロはなぜこの25節の言葉をここで語ったのでしょうか。ある人はここに7章後半全体が信者であるパウロの言葉であることの証拠があると言います。しかし結論から先に言えば、これは文章の流れから言えば、突然挿入されたものと考えられます。パウロはかつての自分を振り返り、その時の心の叫びを24節に記しました。当時の彼としてはこれに対する答えはありませんでした。ですから叫んだのです。しかし今やその解決を彼は知っています。ですからこの切実な問いに対

する決定的な答えを、彼は主への賛美をもって直ちにここに述べずにいられなかった。パウロはこのような書き方をしばしばします。文章の途中で神の恵みに対する賛美が炸裂し、それを書き入れる。エペソ2章5節もそうです。しかしこれは突然挿入した賛美であって話はまだ完結していません。そこで25節後半で彼は話を元に戻しています。これは律法の下にある人についてのまとめの言葉と言えます。「ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

今日の箇所はまずユダヤ人になったつもりで聞けば良く分かります。ユダヤ人は律法を尊んでいます。律法は宝です。そんな彼らにとって、「律法の下にはない」とか「律法から解放されている」というパウロの言葉は容易には受け入れられません。「パウロ、お前は律法を悪だと言うのか」と言いたくなります。これに対してパウロは、律法は良いものだと言いました。それは聖なるものであり、霊的なものである、と。しかし残念ながらそこに救いはありません。それは律法は霊的でも私が霊的でないからです。律法はそんな私を救ってくれる力までは持っていない。そればかりか私の内に住む罪が、律法が命じる方向とは反対方向へ私を引っ張って行ってしまいます。一層私が願わない方向へ、死に至る歩みへと捕らえ連れて行ってしまいます。これは異邦人である私たちにも同じように当てはまるでしょう。2章14節で見たように、私たちも生まれながらにして神の道徳的要求を知っています。そして今や聖書を通してよりはっきり神の戒めを知るようになりました。しかしそれだけでは助けにならないのです。内に住む罪のために私はしたいことができず、結局はこの罪が私の上に大きな力を振るって私を最終的な死へ首根っこを捕まえて連れて行こうとしている。そんな私にどういう希望があるのか。その答えはただキリストなのです。この方を信じて、なお地上での戦いは続くとは言え、これまで述べられて来たように、また次回8章で語られるように、キリストは私たちを罪と死の原理から、支配的力から解放してくださった！キリストに結ばれている者はこの土台に立って戦うことができます。なお地上で激しい戦いがあっても、そこを貫いているのは敗北の調べではなく勝利の調べです。キリストはご自身につながる者をすでに以前の強力な支配からは抜け出させてくださった！信者は罪と死が支配する下にはもはやない！この救いを私たちは、この7章を見ることによって一層感謝したいと思います。そしてキリストにこそ信仰の目を注ぎ、罪に打ち勝つ歩み、聖霊による新しいいのちの歩みへと進ませていただきたいのです。